



中島町笠師

秋空に、白壁が映える建物。漆喰で仕上げられた重厚な壁と黒い瓦屋根。刈り取りの終えた田に杉林。日本らしい情緒あふれる風景が広がる。

七尾西湾へそそぐ笠師川沿いに細長くのびる中島町笠師。

「笠師」の名は、菅笠すががさ比咩神社ひめじんじやの祭神千々姫命ちぢひめのみことが、菅笠を編む業を伝えたことに由来しているそうで、「笠師の祭りの日に雨がよく降るのは、笠が売れるようにとの神様のおはからいである。」との言い伝えも残る。



菅忍比咩神社

また、笠師には10を越える神社・社がある宮の多い町である。

上流から上笠師、中笠師、下笠師と続く集落の家々のほとんどは、平野と山が接する山際に建ち並んでいる。平野の多くを農地とするために、このような配置になったのであろうか。家屋の手前に田、背後に杉林と

いう配置は、落ち着いた印象を与えてくれる。

三つ棟そろった民家

この地域には、「母屋」「納屋」「土蔵」の3棟1組の農家らしい佇



まいが多く残る。

かつて、「三つ棟そろう」ことが農家としてのステータスシンボルとなっていたことから、昭和30年代に土蔵がつぎつぎと造られ「三つ棟そろった農家」が増えたそうである。

三つ棟の中心である母屋は、この辺りに腕のいい大工とその弟子が住んでいたことから、どっしりとした造りの家建てのいいものが多く残る。

納屋は、もともと農作業に使われ

た牛馬のための「厩」として使われていたものもあり、今でも牛馬をつなぐ「釘」が残されている。

牛馬のいなくなった今日、納屋は農業機械倉庫や車庫として使われることが多い。牛馬が農業機械・車に変わり、納屋が現代の「厩」として使われるようになったことには、なかなか感慨深いものがある。

白壁の土蔵

中でも最も目を引くのは、漆喰仕上げの土蔵である。

土蔵は頑丈で、火に強く、湿度の調整ができ、夏涼しく冬暖かい構造をしている。こうした特性をいかし、大切な家財を火災や盗難から守り、安全に保管することができるとして、物置とは少し違ったものとして使われてきた。

漆喰塗りの壁に施された鏝絵で描かれた雲形や「水」の文字は、こうした大切な家財道具を火事から守るようにと願って施されている。

こうした土蔵は、母屋の前、道路側に配されることが多いためであるうか、家紋や願いを込めた鏝絵のレリーフ（龍Ⅱ出世、鶴亀Ⅱ繁栄など）で化粧されているものも多く見かけ

る。この漆喰塗りは、土蔵の見栄えを良くするとともに耐久性が増す効果があり、とてもよく考えられた工法である。